様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３８４

研究課題名（和文）１８世紀ドイツ詩学の物語論的再解釈－模倣説の「情動」を物語の変容から捉える試み－

研究課題名（英文）Reinterpretation of 18th century german poetics: an atempt to understand >affect < in the imitation theory under the view of changes of stories

研究代表者
福田　覚（Fukuta, Satoshi）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・准教授

研究者番号：４０２５２４０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：詩学の情動論的な側面を物語概念によって再解釈する本研究は、一面では、詩学の議論のなかで歴史的な見通しを得るために用いられてきた物語を探る作業となり、崇高概念の様々な側面や古代作品の翻訳をめぐって、テクストや当時の人々の意識のなかにある複数の物語を明らかにして整理した。
別の一面では、作用詩学の情動論的な思考を、実際の悲劇における物語の変容と関係付けて理解する作業となった。物語の関係論という視点で当時の詩学の考え方を再検討した。情念の発生を、劇中の物語のせめぎ合いや、主人公の物語と受容者の物語の重ね合わせといった点から振り返り、「作者性」という概念によって情念論と物語論の接合面の記述を試みた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project was reinterpretation of affect theorie in german 18th century poetics by the concept of "narrative". The study, on the one hand, lead to the research on narratives which had been used to get historical views in the argument of poetics. Latent Narratives in the text or in the consciousness of people at that time, concerning many aspects of the concept "sublime" or translation act of ancient works, were revealed and then set in order.
On the other hand, this study lead to the work that related affect-theoretical thoughts of effect aesthetics to changes of stories in a tragedy. Poetological thoughts at that time were reconsidered from the view of relation among stories. The origin of affect was treated from the viewpoint " competition between stories in a tragedy" or "comparison between story of the hero and one of the accepter". It was tried to discribe conjugation surface between affect theory and narrative theory by the concept of "authorship".

研究分野：ドイツ文学

キーワード：詩学　ドイツ　18世紀　情動　物語

１．研究開始当初の背景

(1)後期啓蒙主義における隠れた模倣説の存在、18 世紀固有の記号論と詩学との関わり、詩学において情念の作用や知識の拡大という契機がもっている体系的位置などの問題から、18 世紀ドイツ詩学の研究を開始した。その後、啓蒙主義詩学とそのさらなる背景構造としての人文主義諸学との関係について、後者の提供する理論範型によって前者の学問的基盤が創発されてきたという観点から、とりわけ初期啓蒙主義に焦点を当てて研究を進めてきた。さらに「諸学の相関」という分析の視点を加えることで、詩学の体系の解明と統合された形で、詩学と他の諸学との連関を解き明かそうとしてきた。

(2)直近の 2010～2013 年度の基盤研究では、「模倣の詩学」のパラダイムにおける情念論の意義を検証した。修辞学の伝統は、啓蒙主義時代の詩学に対して、支配的な思考規則や先導的な観念を与えてくれただけではなく、情念を巧みに利用するという姿勢の情念論を根底にもち、それが、情念を浄化・排除するといった姿勢の（哲学や医学の根底にある）情動論に対抗する形で、より豊かな圏域を開いていることが明らかになってきた。

以上の背景により、情動論と想像力論の接点について学際的に探る次の研究のステップを、当時の学問全体を物語論的知見で捉え返す形で、詩学の＜物語論的再解釈＞という構想に収められないかと考えるようになった。

２．研究の目的

(1)当時の詩学書に見られる詩学上の概念や、古典の翻訳といった営為について、その歴史性の理解をめぐって用いられたこの時代の「物語」（理解のためのストーリー）を整理する。また、現代の視点から詩学史を記述する場合に採用されてきた「物語」についても反省の目を向ける。そうすることによって、詩学史記述そのものの物語性を問う。

(2)啓蒙主義時代の「模倣の詩学」について、ややもすると修辞学的面と哲学的な面に分けて捉えられがちな当時の詩学の姿を、その両面がうまく接合されていたと言えるのか問う。ヴォルフ哲学の影響を受けた詩学は、心身平行説や悟性の能力論に親和的な可能世界論を土台としているが、神の創造した現実世界が最高の可能世界で、創作は神の創造を模倣するという考えの下で展開される「想像力」論では、結局のところ、複数の物語のせめぎ合いから情念が発生するという議論は説明しづらい。「真実らしさ」や「奇異なもの」といった同化や異化の概念は、単一的な物語への誘導のなかで機能するしかないのか。そうした点を考え直すために、古典古代や啓蒙主義時代の悲劇作品が表現している価値の相克に目を向けて、物語のせめぎ合いと情念の喚起との関係を解明する。

３．研究の方法

(1)研究の基盤となる文献収集に力を入れる。ベルリンの図書館での集中的な収集を軸にして進め、電子化資料の利用、国内所蔵資料の利用、入手可能な新しい文献の購入によって補完する。

(2)詩学的概念の歴史性や意義を語るためにその時代に利用されていた「物語」（理解のためのストーリー）を探る。啓蒙主義時代の詩学は、「真実らしさ」や「奇異なもの」を主要契機として、情動面での同化や異化の作用を用いつつ受容者を新たな世界に導こうとしたと見ることができるので、作用美学的な概念に位置づけを与える言説を探る意味で、崇高概念を中心的な対象として検討を開始する。I・J・ピューラを軸に研究を進め、崇高論から翻訳論へと議論の対象を展開させる。

(3)古典作品の無韻での翻訳という啓蒙主義時代のトピックをめぐって、詩学史のなかの出来事を構成していた「物語」を整理する。さらに、ラテン語訳やフランス語訳で事足りていた状況が 18 世紀半ばに変化してドイツ語訳が求められるようになったソフォクレスの悲劇の翻訳というテーマを素材として、翻訳という営為の背後にある詩学史の「物語」を描出する。

(4)さらに、啓蒙主義時代の詩学の理論装置を物語論的に再解釈することを試みる。これまでの理論的考察を、具体的な作品を視野に入れるところまで拡張して行う。啓蒙主義時代の詩学書において展開された情念論をめぐる議論をソフォクレスの悲劇に即して見ていき、同時にソフォクレスの悲劇の物語構造を分析することで、情念論を物語概念で捉え直す議論を構築する。

(5)ソフォクレスの運命悲劇について整理した情念論と物語論をめぐる議論を、啓蒙主義時代の悲劇に当てはめることができるかを検討する。演劇作品のストーリー展開を物語のせめぎ合いから生成されるものと見て、その動態を把握し記述する。そうした上で改めて劇中の物語の動態と情念の喚起の関係について考察し、当時の演劇に見られる情念論の考え方を物語概念から捉え返す。

４．研究成果

(1)研究の基盤となる文献収集については、とりわけベルリンの国立図書館での集中的な収集によって、当初の予想を上回る成果を

得た。１次文献の電子化が進み、それが国外からも利用できるようになったことで、館内と館外で対象を区分けをしたかたちの収集が可能となった。

(2)詩学的概念の歴史性や意義を語る際にその時代に利用されていた「物語」を探るため、崇高概念の受容に着目した。ドイツにおける崇高概念の受容を整理するには、文献中に現れた様々なスタンスを踏まえると、少なくとも３つの記述的物語が必要になることが明らかになってきた。新旧論争で崇高論が古代派にとって旗印となったという物語、バロックの虚飾性を批判する際の拠り所になったという物語、そして、崇高を鋭敏さという悟性能力との関連で捉え返す物語である。
作用性という点では、文の明晰さを求める虚飾性批判は同化的な側面が、逆に詩人の鋭敏さへの着目は異化的な側面が物語の根底にあると推察された。新旧論争というのは、受容者の物語の変容に関わる作用美学とは異質な、変容した物語の到達地点やその変容の方向に関わる、そういう意味では次元の異なる記述的物語で、模倣説においても最後に問題となる、真理性の再発見なのか創造なのかという理論枠組みに関わるものと思われた。現代では、美と崇高を対比的に捉える詩学史の物語も強固なものがある。前者が作用美学の同化的側面と、後者が異化的側面とより親和的であるとすれば、崇高をめぐるある種の物語は、崇高に類する概念を異化効果と結びつける詩学的立場を捉えるのに適していると推測される。その点は今後引き続き文献学的に確認していく必要がある。

(3)古典作品の無韻での翻訳という啓蒙主義時代のトピックをめぐって、詩学史のなかの出来事を構成していた物語を整理した。
ピューラやランゲらのハレの言語協会とライプツィヒの言語協会との関係は、ライプツィヒとチューリッヒの間で論争が展開される前の段階を詩学の歴史においていかに記述するかということに示唆を与えてくれると考えられた。なかでも、ピューラがライプツィヒのゴットシェートのもとに『アエネーイス』の無韻による試訳を匿名で送ったことに端を発する一連の出来事は、後に様々な波紋を呼んでいく点だけでなく、その議論のあり方に関わる言説と関わらない言説を見ることで、詩学の理論枠組みの変容や関係を考える基盤となる。ゼッケンドルフが先鞭を付け、ゴットシェートも推奨したとされてその名と結びつけて語られた古代の作品の無韻による翻訳の背後には、様々な記述的物語が見て取れることが認識された。
当時発行された言語協会の雑誌が古典の翻訳を重視することには、自国の文芸の水準を高める新旧論争的な物語がある。翻訳の善し悪しの判定は、「良き趣味」の解釈に関わり、背後には詩学の規則を誰が定めるのかという問題が広がる。ただし、諸学の相関という水準、詩学の反省的な議論の水準との関わりは比較的薄く、そうした水準からは言説の空間として距離があることが確認された。

(4)さらに、ソフォクレスの悲劇の翻訳というテーマを素材として、背後にある詩学史の物語を描出した。そこでは、古典の翻訳をめぐる一つの出来事を追いかけた時に見えてくる物語群を探るというかたちを取った。ラテン語訳とフランス語訳で事足りた時代からドイツ語訳が必要な時代への移行、新旧論争の構図に関わる古典古代の作品の位置づけ、押韻に縛られることへの意識の幅などが、一つの出来事の背後に、意識のなかの「物語」として、重層的に存在していることが見て取れた。

(5)啓蒙主義時代の詩学の理論装置を物語論的に再解釈することを試みた。これまでの理論的考察を、具体的な作品を視野に入れるところまで拡張して行った。
ソフォクレスの悲劇の解釈をめぐって、物語の関係論という視点からゴットシェートの詩学の考え方を捉え直した。悲劇的な筋立てを生み出している、劇のなかでの複数の物語のせめぎ合いではなく、主人公の物語と受容者の物語の重ね合わせにフォーカスする点にゴットシェートの解釈の特徴があると理解された。当時の同化と異化を基軸とする作用詩学は、このような形で物語論的に再解釈されることが分かり、情動論との関連では、その同化と異化の心理的作用に情動の生起が伴うことが認識された。

(6)
ソフォクレスの運命悲劇について整理した情念論と物語論をめぐる議論を、啓蒙主義時代の悲劇に当てはめることができるかを検討した。①啓蒙主義時代の演劇作品のストーリー展開を、人物単位の物語のせめぎ合いから生成されるものと見て、その動態を把握し記述した。②さらには、物語の動態と情念の喚起の関係について考察し、当時の作劇から窺える情念論の考え方を物語概念から捉え直した。
前者に関しては、臨床心理の解釈法に近づけるかたちの記述も試みた。精神分析的解釈のなかでも物語の関係論という視点をすでにもっていると見れるフロイトの作品解釈を参照するなどした。さらに、物語展開のグリップを握る者という観点から、特権的な作者がいないなかでの作者性の争いという様相について記述し、作者性を喪失するとその者の描く物語が変容する点などを考察した。
後者に関しては、悲劇が潜在的な葛藤を可視化し、作者性を失った主人公が最後に不幸のどん底で作者性を取り戻すところに情動性の極点があり、作品世界の悲劇的結末と受容者の現実世界のパラダイムの更新がそれに

よってリンクする様を考察した。また、劇作品全体を通してなされる、同化と異化をめぐる情念の喚起は、詩学的な議論の枠組みのなかで作品世界と現実世界について想定されている距離感を反映したものとなっていることが理解された。大枠として、同化的情念は登場人物が作者性を失っている状態に対して喚起されること、異化的情念は受容者の物語への囚われに関わることが推定された。

今後は、こうした思考法での研究を継続して、今回の研究課題で明らかになった諸点を、より広範な詩学史記述の織物のなかに織り込むことや、その上に立って、物語概念で再解釈された啓蒙主義詩学の理論装置を体系的に整理したりすることが望まれる。こうした研究によって、模倣説における真理連関の把握や情念の昇華といった主題を物語の概念で捉え直すなかで、「自律的な近代美学の誕生」、「市民劇の登場と変質」、「規範詩学の克服」といった詩学史の定番の図式が相対化されてくることが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 ６ 件）

①福田覚「レッシング『ミス・サラ・サンプソン』における物語の動きと情念の喚起――「作者性」という視点からの解釈の試み」（希土同人社、2018 年８月掲載予定）第 43 号、査読無

②福田覚「レッシング『ミス・サラ・サンプソン』における父の規範と娘の葛藤――両価的感情の物語表現として見た悲劇の構図」『ドイツ啓蒙主義研究 15』（大阪大学大学院言語文化研究科、2018 年５月 31 日）S.23-39、査読無

③福田覚「悲劇の目的と情念をめぐる詩論のかたち――ニコライ、ゴットシェート、レッシングに見る作用詩学の物語論的再解釈にむけて」『希土』（希土同人社、2017 年８月１日）第 42 号　S.2-32、査読無

④福田覚「J.E.シュレーゲル、ゴットシェートが接した「ソフォクレス」――受容の２つの局面から考える詩学史の物語論的再解釈」『ドイツ啓蒙主義研究 14』（大阪大学大学院言語文化研究科、2017 年５月 31 日）S.55-76、査読無

⑤福田覚「ピューラの『アエネーイス』訳の掲載をめぐって――ゴットシェートとの関係を語る一つの挿話」『希土』（希土同人社、2016 年８月１日）第 41 号　S.29-57、査読無

⑥福田覚「ピューラの崇高論と詩学史を構成する物語――ロンギノスの受容、スイス派との関わり」『希土』（希土同人社、2015 年８月１日）第 40 号　S.57-79、査読無

６．研究組織
(1)研究代表者
福田　覚（FUKUTA Satoshi）
大阪大学・言語文化研究科・准教授
　研究者番号：40252407